

「全体とすべて」第一集

ベルゼバブが孫に語った物語

人間の生に対する客観的で公正な批判

ゲオルギー・イヴァノヴィッチ・グルジエフ 著

郷 尚文 訳

訳者略歴 郷 尚文

東京外国語大学卒業後、海外営業職ほかを経てフリーランスの翻訳者となる。一九八八年に『ベルゼバブ』の翻訳を開始し、以後、グルジエフに発する伝達の流れにくみする複数のグループおよび個人と接触をもつ。一九八九年にインドの Osho Commune International を訪れた後、グルジエフに由来する舞踏・体操・エクササイズを集めた「ムーヴメンツ」をめぐる同コミュニティでの試みに関与。一九九七年よりムーヴメンツを中心とするプログラムを日本および海外で主導。二〇〇一年に『覚醒の舞踏と創造と進化の図絵』（市民出版社）を発表。二〇一四年にグルジエフ全集、二〇一七年にグルジエフ総論シリーズの発行を開始。 <http://gurdjeff.la.coccan.jp/>

目次

「全体とすべて」 三部作	3	第十六章 《時間》の相対的理解	63
好意的助言	4	第十七章 大いなる不合理——ベルゼバブの意見では、われらが太陽は照らさず、熱さず	69
第一巻	1	第十八章 前代未聞の大いなる実験	76
第一章 思考の喚起	5	第十九章 ベルゼバブによる惑星地球への二回目の下降	89
第二章 プロローグ—ベルゼバブはどうしてわれわれの太陽系に来たのか	27	第二十章 ベルゼバブによる惑星地球への三回目の飛行	103
第三章 宇宙船カルナークの落下における遅れの原因	30	第二十一章 ベルゼバブのはじめてのインド訪問	112
第四章 落下の法則	35	第二十二章 ベルゼバブのはじめてのチベット訪問	123
第五章 大天使ハリトンの発明	37	第二十三章 ベルゼバブの惑星地球での四回目の個人的滞在	130
第六章 永久運動	38	第二十四章 ベルゼバブの惑星地球への五回目の飛行	151
第七章 存在に伴う真の義務に目覚めること	40	第二十五章 大聖者アシアタ・シエマツシユ、天より地球に遣わされる	165
第八章 なまいきなベルゼバブの孫、ハシイーン、あつかましくも人類を「なめくじども」と呼ぶ	42	第二十六章 大聖者アシアタ・シエマツシユの深いお考えを伝える『状況の恐怖』と題されたレゴミニズム	168
第九章 月の生まれた理由	43	第二十七章 大聖者アシアタ・シエマツシユが人間の存続のために設立した団体	174
第十章 なぜ「人間」は人間ではないのか	46	第二十八章 大聖者アシアタ・シエマツシユの神聖な労働の成果のすべてを破壊した張本人	184
第十一章 現代の人間の奇妙な精神——その激しやすさ	49	第二巻	194
第十二章 大騒動のそもそもの原因	51	第二十九章 過去の文明の果実、ならびに現代の華	194
第十三章 なぜ人間の理性には夢が現実として映るのか	54	第三十章 芸術	210
第十四章 まったくぱっとしない見通しの始まり	56	第三十一章 ベルゼバブの惑星地球での六回目にして最後の滞在	242
第十五章 ベルゼバブの惑星地球へのはじめての下降	58		

「全体とすべて」 三部作

第一集——『人間の生に対する客観的で公正な批判』あるいは『ベルゼバブが孫に語った物語』

第二集——『注目すべき人々との出会い』

第三集——『生は《私が在る》ときにのみリアルである』

すべては、完全に新たな論理的展開の諸法則にのっとり、以下に掲げる三つの主要な課題の達成をその厳格な目的として書かれた。

第一集——過去の幾世紀にもわたって読者の精神と感情に根を下ろした、世界のすべての事柄についての信念と見解とを、非情にも、いかなる妥協もなしに破壊すること。

第二集——新たな創造のために必要な素材に読者を馴染ませ、その健全さとすぐれた性質とを明らかにすること。

第三集——読者の精神と感情において、現在の彼が知覚するような幻の世界ではなく、現実の世界の、実証可能にして夢ならざる認識が生まれるのを助けること。

好意的助言

(出版の準備がすでに整い、本書の原稿が印刷所へと発送される直前に、著者によって即興的に書き加えられた)

耳から受け取った、あるいは本から受け取った新しい印象が現代人のなかになれほどてんでばらばらの認識をもたらすかについて実験を通じて説明していくなかで私の行った数々の推理と論証に基づき、また、私がいましがた思いだした、はるかな古代から現代まで伝わるある格言、すなわち……

「どんな祈りであれ、それが《高次の諸力》に聞き入れられ、しかるべき答えをもたらすためには、三回唱えられなければならない。

まず、両親の魂の幸せと平安のために。

次に、隣人の幸せのために。

そして最後に、自分自身のために」

……という格言の主旨にのっとり、すでに出版の準備が整った本書の最初のページに、私は次のような助言を書き加えることの必要性を認めるものである。

「私の書いたものをそれぞれ三回ずつ読むように。

一回目には少なくとも、あなたがあらゆる現代的な書物や新聞を読むときに機械的にしているようなやりかたで読みなさい。

二回目には、まるで誰かに聞かせているかのように。

そして、三回目になってから、私が書いたものの真髄を究めようと努力しなさい」

その後においてのみ、あなたは、私が書いたものに対する、あなただけにふさわしい、あなた自身のものである、かたよりのない判断が生まれることを期待できる。また、やはりその後においてのみ、私の願いはかなえられ、あなたは、あなた自身の理解により、私があなたに用意した特別の恩恵を手に入れることができる。そして、それがあなたにとって可能であることを、私は、わが存在の全体をもって祈るものである。

著者

第一巻

第一章 思考の喚起

責任ある年齢に達して以来のわが独特の人生を通じて私のなかに形成された数々の確信のひとつとして、どの時代にも、地球上のどこにおいても、理解力の発達においてどのような段階にある人々の間にも、各種の理想の実現をどのような形で求める人々の間にも、何であれ新しいことを始めるときには欠かすことなく、どんなに無知な者にも理解できる特定の言葉を声に出して、さも無くば少なくとも心の中で唱えるという習慣が見られる。この言葉には時代ごとに異なる表現が与えられてきたが、今では次のような表現になっている。

「父と子と聖霊の御名においてアーメン」

いま私にとってまったく新しいものであるこの事業、すなわち著述業に取りかかるにあたって、やはりこの言葉を発することによってはじめとし、しかもこれをただ口にするだけではなく、とりわけはつきりと、むかしトゥールーズの周辺に暮らした者たちが「全面的に表現されたイントネーション」と呼んだものをもって発音するのは、このような理由からである。もちろん、こうした全面的な表現の能力が私の全体のなかに生まれられたのは、この種の表現に備えて私のなかに形成され、すでに確固たるものとなっている素材のおかげ以外の何ものでもない。おおむね人生の準備的年代において人間の本性

に形成されるこのような素材は、のちの責任ある人生において、このような言葉を、それにふさわしい活度をもって発音する能力を生み出すのである。

このような手順を踏んで始めた以上、今や私はすっかりくつろぎ、宗教道徳についての現代人の理解をまねて、この新しい事業の先行きが「まるで自動ピアノのように」順調であろうことを、すべての疑いを離れて確信するのも悪くはなからう。

ともあれ、私はこのようにして始めたのであり、その後の進展についてとりあえずのところ私に言えるのは、かつてある盲人が口にしたのと同じ言葉、つまり「見てみなければわからない」というひとつとだけである。

何よりも先に、私は自分の手、それも右の手を：

…つまり、私を最近訪れた不運な出来事のために今のところ少しばかり傷ついてはいるが、ほんとうに私のものであり、生涯を通じて私を一度も裏切ったことのない右の手を、これも私のものであるわがハート（ただし、私の全体のなかのこの部分がどれほど私だけに忠実かについてはここで説明する必要はないだろう）の上に置き、あからさまに打ち明けることにしよう。私は個人的には本を書きたいなどとこれっぽっちも思っていないのだが、私自身とはまったく無関係のあれこれの状況が私に書くことを迫っている。このような状況が偶然に生じたものなのか、それとも外的な諸力によって意図的に創造されたものなのかを、私はまだ知らない。私にわかる

のはただ、このような状況が私に書くことを迫るのは、たんなる「まあまあ」な作品、たとえば読者を読みながら眠らせるようなものではなく、ずっしりかさばる大冊だということである。

ともかく、始めることにしよう……。

だが、何から始めたものか。

ああ、なんとということだ。およそ三週間前、私に出版を運命づけられたさまざまな考えに与えるべき構成や展開について思いをめぐらせながら、やはり何から手をつけてよいのやらわからなかったときにも味わった、あのきわめて不愉快で、なじみがない感覚が、ふたたびくりかえされようとしているのか。そのときに味わった感覚をいま言葉にするなら、「あふれでる思考に溺れることの恐怖」とでも言うしかない。

そのときにはまだ、この不愉快な感覚を鎮めるために、私は、現代人同様、私にも遺伝されている、あの邪悪な特性の力を借りることもできた。この特性はわれわれ全員に遺伝されており、おかげでわれわれは、望むことはなんであれ、なんら良心の呵責を感じることもなく、「明日まで」延ばすことができるのだ。

そのときの私にとって、そのように延期するのはじつに簡単なことだった。実際に著作を始める前の私は、時間はいくらでもあると思っていたのだから。しかし、そのような延期が不可能となったいま、私は確実に、いわば「たとえ張りさけるとも」仕事に

かからねばならない。

それにしても、いったい何から始めたものか……。

ははあ……わかったぞ！
ユウリカ

これまでの人生のなかで私が読んだほとんどの本は前書きで始まっている。よって、私のこの本も、前書きに似たもので始めることにしよう。

「似たもの」というのは、おおよそわが人生のプロセスのなかで男と女の区別がつくようになって以来、私はすべての、完全にすべてのことを、《自然》の富の破壊者となった私と同類の二本足の生き物たちとは違ったふうにしてきたからである。したがって、この本もまた、他のどんな作家もしないようなやりかたで始めるのが当然であり、そうすることによって、私は同時に、すでに自分にとって義務的なものとなった原則に従っていることにもなる。

私は、慣習的な前書きのかわりに、ひとつの「警告」をもってこの本を始めることにする。

かりにそれが、私の生理的原則と心理的原則のみか、私の「意地悪」な原則にも逆らうことなく、しかも——もちろん客観的な意味で——きわめて誠実であるという理由だけによるものだったにせよ、これはまことに意になつたやりかたである。なぜなら、私の本を読むことにより、ほとんどの読者の内側では、あどけない夢をしかもたらさない数々の想念が黙らされることになり、そのために読者は、読者の現在の生活を飾る美しいものや、そうしたものを将来において獲得する可能性ばかりか、読者の所有するすべての「富」を、それが相続によって得ら

れたものか、それとも読者自身の労働によって得られたものかを問わず、しかも遅かれ早かれいずれはだれにでも起こるようにゆっくりとではなく、たちまち完全に失うであろうことを、私は、私をよく知る人々とともに、疑いような確率で予測するからである。

プロの作家たちは、本のこうした導入部を読者への呼びかけによって始め、そのなかに、とほうもなく大げさで、「蜜のように甘く」、「ふくれあがった」フレーズをちりばめるのがふつうである。

この点においてのみ、私も彼らを見習って、私の本を似たような呼びかけによって始めることにする。ただし、私はこの呼びかけが彼らの書くような「甘い」ものとはならないように注意しよう。このような呼びかけを「甘く」するために彼らが用いるのは悪質な知ったかぶりにほかならず、彼らはそれによって多少なりとも正常な読者の感受性をくすぐろうとするのだから。

さて……。

わが親愛なる、誇り高き、意志堅固たる、そしてもちろん、とても我慢強い紳士諸君。そして、わが尊敬する、可愛らしき、公正なる淑女の方々。そして——許してくれたまえ、だいじなひとことを忘れていた——わがけっしてヒステリックではない淑女の方々よ。

わが人生の最終的な一段階において生じたもろもろの状況によるものとはいえ、私はいま、数冊の本を著そうとしており、私のこのような意図をあなた

がたにお伝えできるのは私にとって晴れがましいことである。しかしながら、これまでの人生のなかで本、あるいは「啓発的文章」なるものを一度も書いたことがないのみか、「文法性」なるものを必ず守らなければいけないような手紙一通さえも書いたことがないために、私はいま、プロの作家にまでなろうとしているのだが、作家が守ることになっている規則やら手順やら、あるいはいわゆる「お行儀のよい文学的言語」についての訓練が私にはまったく欠けており、そのため私には、普通の「商標つき作家」が書くのとは、つまりあなたがたにとってはすでに「自分の体臭と同じぐらい身近なものとなっているはずの彼らの文体とはまったく違ったふうを書く」としかできない。

私が思うに、これによってあなたがたが直面する最大の困難は、おそらく次のことに由来する困難だろう……あなたがたがまだ幼かったころ、あなたがたのなかには、あらゆるたぐいの新しい印象を能率よく処理する自動的な機能が組み込まれ、それが今となっては、あなたがたの精神全般と理想的なまでに調和してしまっている。その「おかげ」で、今のあなたがたは、ご自分の責任ある人生において、どんな個人的努力の必要性も感じていない。

正直なところ、私がこの打ち明け話の主題と見なすのは、作家としての規則や手順に関する私の無知についてというより、現代生活を営むうえで作家だけではなく、あらゆる普通人にとって欠かせないものとなった「お上品な文学的言語」に関する私の無

知についてである。

前者、つまり作家が守るものとされている規則や手順やらに関する無知については、私はたいして遺憾に思っていない。

というのも、このような無知は、すでに人々の間であたりまえのことになっている。このような無知が生まれ、いまや世界中にはびこっているのは、あのともうもない新病のせいである。この二十年ないし三十年の間、三つの性からなる全人類のなかで、とりわけ半分目を開けたまま眠りこみ、顔はあらゆる種類のにきびにとつての肥沃な土壌となった連中の多くが、どういうわけか、この新病に感染することになったのだ。

この病気は次のように発病する……もしもこれにかかった患者がわずかなりとも字を解し、その家賃が三ヶ月先まで前払いされていようものなら、彼、彼女、あるいはそれは、疑いようもなく、あれこれの「啓発的記事」または一冊の本を書き始める。人類のこの新しい病気と地球上でのその蔓延について熟知している私は、あなたもお察しのとおり、学識ある「お医者さま」が「免疫」と呼ぶものをあなたがすでに獲得しており、したがって作家が守るべき規則や手順に関する私の無知に対して激怒することはないのではないかと考えている。この理解に従って、私は先に触れたような文学的言語に関する自分の無知をこの打ち明け話の主題とすることにする。

自己正当化のため、またおそらくは、現代生活に欠かせないものとされているこの種の言語に関する

私の無知に向けての、あなたがたの醒めた意識の側からの非難を弱めんがため、私は心を謙虚にし、頬を恥ずかしさのあまり真っ赤に染めて、白状せねばなるまい……。私も子供のころにこの種の言語を仕込まれ、責任ある人生に向けて私の準備を整える仕事を受け持った年長者の一部などは、そのためにどんな脅しを用いることもいつときも「ためらったりちゅうちよしたり」せず、全体としてこの種の言語を構成するところの一連の「ニュアンス」を私に「丸暗記」させたりしたのだった。だが、読者にとつてはもちろん不幸なことに、丸暗記したもののおかげで私のなかに残ったものはひとつもなく、現在、私の作家としての活動に影響するものは皆無である。

これはつい最近になってわかったのだが、私のなかに何も残らなかったのは、私のせいでも、私の尊敬に値する、あるいは値しない先生がたのせいでもない。私をこの方面で教育するために人々が注いだ努力は、「神のお創りになったこの地球」に私が出現した瞬間に起きたある出来事のために、どれもこれももうまくいかなないことに決まっていたのである。この出来事について、ヨーロッパで有名なオカルチストがとて微妙な「心理学／生理学／天文学的」調査とかいうものの後に説明してくれたことによれば、その瞬間、となりの家のエジソン蓄音機から生じた音の振動が、家のびつこのきちがい山羊が窓ガラスにあけた穴を通して侵入し、しかもそのとき、私の産婆はココインのしみたドイツ製の錠剤を、それも「まがいもの」ではないやつを、音楽にあわせ

て、ろくに楽しみもせずしやぶっていたとのことである。

じつをいうと、これはドイツのヘル・ストウンプシンシユモーゼン教授の方法による長い熟考の後に思いついた推論なのだが、人々が日常的に体験するものではない、この珍しい出来事のほかに、現在の私のこのような状況の原因となったのは、その後の準備的年代と成人期を通じての他人との交際において、私は本能的あるいは自動的に、そしてときには意識的すなわち私の流儀として、この種の言語の使用を避けてきたということである。そしてこのような些細な——いやおそらくは些細ではない——点に至るまで、私のすること全般には、準備的年代を通じて私の全体のなかに育まれた三つの素材の影響が反映されている。この三つの素材については、この章の少しばかり後のほうで触れることにしよう。

何はともあれ、アメリカの広告塔さながらに、四辺からのこうこうたる光によって照らし出された本当の真実、しかも今となってはどんなペテン師の悪知恵をもつてもごまかしたい事実として、寺院舞踊のなかなかなすぐれた教師として近頃では多くの人々に知られるようになったこの私は、今やプロの作家に転向し、しかも子供のころから「何をするときにも必ずそれを大量にする」ことが習慣となっていて私であるから、もちろん大量に書くことになるわけだが、それにも関わらず、読者もお察しのとおり、私にはそのために必要な、練習の成果として人が自動的に獲得し、自動的に効果を発揮するところ

の能力が欠けており、よって私は、私の考えのすべてを、どんな文学的操作も「文法的知ったかぶり」も施すことなく、生活によって確立された普通の単純な日常的言語で書くことを強いられている。

しかし、壺はまだ満たされていない……まだいちばん重要な問題にけりがついていないのだから。つまり、どの言語で書くのかについて。

私はロシア語で書き始めたのだが、賢者中の賢者であるムラ・ナスレディンだったら言うであらうに、この言語には限界がある。

(ホジャ・ナスレディンとも呼ばれるムラ・ナスレディンは、ヨーロッパやアメリカではほとんど知られていないのだが、アジア大陸のどんな国でも、その名はあまねく知れわたっている。この伝説的人物は、アメリカのアンクルトムやドイツのチル・オレンシュピーゲルに相当するもので、知恵ある格言にも似た、東洋で人気のある無数の小話は、昔から伝わるものも、最近になってから追加されたものも、現在でも過去においてと同じように、ムラ・ナスレディンの作とされている。)

ロシア語がたいへんすぐれていることは否定できない。私はそれを好きでさえいる……。もっともそれは、世間話をしたり、だれかの家柄について噂したりといった用途に限ってだが。

ロシア語は英語と似たようなものだ。英語もとてもすぐれてはいるが、それもまた、「喫煙室」の安楽椅子に腰をかけ、さらにもうひとつの安楽椅子に足を投げ出して、オーストラリアの冷凍肉や、インド

問題について話したりといった用途に限ったことである。

この二つの言語は、モスクワで「ソリヤンカ」と呼ばれるスープに似ている。そのなかには、あなたと私を唯一の例外として、お好みのものが何であれ……シエエラザード姫の「食後用のチェスマ*」までも放りこまれる。

*原注：「チェスマ」はヴェールのこと。

さらに言うておくべきこととして、私が若年時代において偶然に——いやおそらくほんとうのところは偶然にはなく——過ごした環境のために、私はこれまでの人生で、とりわけ真剣に、そしてもちろんいつも自分自身に強いながら、とてもたくさんの言語の会話や読み書きを覚えなければならず、それにもかかりの流暢さが要求されてきたため、私が意外にも《運命》によって強いられることになったこの職業に従事するにあたって、もしも練習によって得られる「自動性」の助けを借りないことに決めたのなら、自分が習得したこれらの言語のどれを使用してもよかつただろう。

しかし、私が賢明にも、自動的に獲得され、長年の使用によって便利なものとなった自動性の助けを借りることにするならば、著述に使うことのできるのは、ロシア語とアルメニア語のどちらかに限られてしまう。これまでの二十年から三十年にわたって私の過ごした環境が、他人との交際にあたってこの

どちらかの言語の使用を要求するものであったため、私はこの二つの言語について、より多くの練習を積み、自動性を獲得することとなったからだ。

やれやれ！……このように決めてもなお、一般人の間ではめったに見られない、わが精神の特異な一面が、早くもわが全体を苦しめてやまない。

ほとんど円熟期といってもよいようなこの年齢において私をこれほど不幸にする最大の要因は、私がまだ小さいころに、私の独自の精神には、いつでも、何をするにあたって、みずからの全体を民衆のなかで生まれたもろもろの格言の主旨に従わせようとする傾向が、現代生活を営むうえで何の足しにもならない他のがらくたといっしよに植え付けられていることである。

わが人生におけるこれと似たような——もっとも、はつきり限定することはできない——他の局面においてと同じように、今も、ほとんど冗談としか思えないほど作りの悪い私の脳みそを「かけめぐって」いるのは、はるか昔の人々の生活のなかで生まれたある格言である。はるか昔から語り継がれてきたこの格言は、今では次のような言葉となっている。

「あらゆる棒に二端あり」

私が思うに、この不思議な格言に隠された基本的な考えと、その本当の意味を知るには、多少なりともまともに思考する人間の意識のなかに、まず何よりも先に、ひとつの仮定が生まれなければならない。それは、この格言の土台となり、この格言に意味を持たせるもろもろの考えの総体のなかに、幾世紀に

もわたって人々の認めてきた真理が込められているという仮定である。それが説くところによれば、どのような現象から生じたものかを問わず、人生で観察されるすべての現象は、もしもそれ自体が別の現象のもたらす二つの正反対の結果の片方であるならば、この現象も、やはり必ず二つの正反対の結果をもたらずにはいない。たとえば、性格の異なる二つのものから得られた「何か」が光をもたらずならば、それは必ずその正反対の現象、つまり闇ももたらず。また、生物の有機体のなかに、それと感ずることのできるような満足をもたらず原因になるものは例外なく——もちろんやはりそれと感ずることのできるような——不満ももたらずであり、これはどんなときにも、どんなことにもあてはまる。

当然ながら、棒には二つの端があり、この格言では、その片方が良い方、もう片方が悪い方とされているのだが、この棒によってあらわされた幾世紀にもわたる知恵の結晶を今の問題にあてはめてみるに、もしも私がこの本の執筆で、長年の習慣によつてのみ人が獲得できる前述したような自動性を用いることにするならば、それはもちろん私自身にとつてはたいへん都合のよいことではあるが、この格言のいわんとするところによれば、読者にはその正反対の結果がもたらされるはずである。そして、良いことの反対が何であるかについては、たとえばあなた自身の持ち主でなくとも簡単におわかりになるう。

要するに、もしも私が自分の特権を行使して、棒の良い方の先をとるならば、悪い方の先が「読者の

脳天を直撃」するのは避けられないということだ。

これはほんとうに避けられないことなのかかもしれない。というのも、私がこの本のなかでおおいに触れようと思っている各種の哲学的問題のいわゆる「精髓」をロシア語で表現することはできず、一方、アルメニア語を使えばそれが可能なのだが、現代のあらゆるアルメニア人にとって不幸なことに、アルメニア語を現代的な考えの表現のために用いることは、すでに実用的とは言えなくなってしまっている。

このような現実を前にして、わが内面の痛みをやらげられるために言っておきたいのだが、青年時代、いろいろな哲学的問題に夢中になっていたころ、私があるところに話すことのできた言語のなかでもっとも——母国語に比べてさえ——気に入っていたのが、このアルメニア語だった。

そのころの私がアルメニア語をもっとも気に入っていた最大の理由は、それが独創的な言語で、近隣の、あるいは同族の言語となんら共通のものを持たないことだった。

博識の「言語学者」も認めるように、アルメニア語の保有するすべての音は、それぞれがこの言語に特有のもので、そのころの私の理解力をもってさえ、この言語が、その国を構成する民族の精神にぴったりと呼応したものであることは明らかだった。

だが、過去の三十年から四十年の間に私が目撃したアルメニア語の変化は多大なものであり、その結果、大昔から伝わる独立した独創的言語にとつてかわったのは、いまだに独創的にして独立しているこ

とは否定できないにせよ、「複数の言語の喜劇的ごつまぜ」と呼ぶにふさわしい言語であり、その子音の総体が多少なりとも意識的で理解力のある聞き手の耳に入ったとすると、それはまさしく、トルコ語、ペルシャ語、フランス語、クルド語、ロシア語の単語の「音声」と、いくつかの「消化不能」にして不鮮明な雑音のごった混ぜに聞こえるのである。

これとほとんど同様のことが私の母国語であるギリシャ語についても言える。私は子供のころにギリシャ語を話し、その「自動的連想喚起力の味わい」とても呼ぶべきものを私はいまだに忘れていない。おそらく、望むものはなんであれ、私はギリシャ語で表現できる。ただし、単純な、いささか喜劇的な理由により、これを著作に用いることはできない。だれかが私の言葉を筆記して、それをさらに他国語に翻訳しなければならぬのだが、いったいだれにそれができるだろう。

断言するに、現代ギリシャ語の最高の専門家にしてみたところが、私が子供のころに吸収したギリシャ語で書いたものを一言半句たりとも理解しないはずだ。なぜなら、わが親愛なる「同国人たち」もまた、自分たちの会話においてさえ現代文明の旗手たちの真似をするためにはどんな犠牲をも辞さないという覚悟に燃えながら、ちょうどアルメニア人が、この三十年から四十年の間、ロシアのインテリゲンチヤになろうとして彼らの母国語を扱ったのと同じやりかたで、私の母国語を扱ったからである。

遺伝によって私とその精神と本質とを知ること

なったあのギリシャ語と、現代のギリシャ人が話す言葉とは、ムラ・ナスレディンの言い草によれば、「釘の音と鎮魂歌」ほどにも違っている。

さて、どうしたらよからう。

ああ、心配しないでくれたまえ、私の知ったかぶりの購買者よ。大量のフランス産アルマニヤックとカイセリ産パストウルマ「パストラミ」さえあれば、私はこの困難な状況からさえ、必ずや抜け道を見つけることだろう。

私はこのようなことには慣れている。

人生においてあまりにも多く逆境に巻き込まれ、そしてそれを克服してきたために、すでにこのようなことは、私にとってあたりまえのことになってしまった。

問題の件についてはさしあたってこのようにしよう……。ある部分についてはロシア語で、ある部分についてはアルメニア語で書くのだ。そうすることのために感じないのは、私のまわりに「たむろする」連中のなかに、この二つの言語について「達者」な者が何人かおり、彼らが私のために、かなり手際よく筆記や翻訳をやってくれるものと、当面の期待を寄せているからだ。

いずれにせよ、あなたの心に銘記してもらうために——それも、あなたが習慣的のものを感じたり、あるいはそれを頼りに自分の名誉にまでかけて誓ったりするようなありふれた記憶によってではなしに覚えておいてもらうために——ここでふたたびくりかえすのだが、これからどんな言語を使おうとも、

常にそして全面的に、私が「お上品な文学的言語」と呼んだものの使用は避けることにする。

この点に関して非常に興味ぶかく、あなたがたの最上の知識愛を授けられる価値があり、しかも、あなたがたが通常に抱かれる概念よりもおそらく高いところにある事実として、古代の神秘学者の言葉を借りて言うなら私の「惑星的身体」、それもどういうわけか主として「右半身」には、幼年期の早いころから——つまり、鳥の巣を壊したり、友人の妹をからかったりする欲求が私のなかに生まれたと同じころから——ある本能的な、自分ではどうしようもない感覚が目覚めだし、そしてその感覚は、私がのちに舞踊教師となるころには一定の感情へと成長し、そしてさらに舞踊教師としての仕事柄、たくさんのタイプの人間と接触するうちに、それは私のいわゆる「頭」で次のような確信となった……この種の文学的言語を作り出す人々や「文法家」たちは、各自の母国語についての知識の点で、わが敬愛するムラ・ナスレディンが「連中にはオレンジの質について豚と議論するのがせいっぱい」と呼んだ二本足の動物とまったく変わるところがない。

われわれの祖先と歳月によって育まれ、われわれに伝えられてきた良いものをだいにしにする「害虫」に成り下がったこうした連中は、この叫びださんがばかりに雄弁な真実についてこれっぽちの考えもなく、おそらくは聞いたこともないのだが、人間を含むあらゆる生き物は、その準備的年代において、古代のコルコラ人が「連想*の法則」と命名した法

則に従って自動的に精神を動かす傾向を獲得するのであり、あらゆる生き物として特に人間の認識のプロセスは、例外なく、この法則の独占的な支配下に進行する。

* 訳注：「連想」は associations の訳。

associations は、広い意味では「各種の結び付き」であり、「連想」よりも意味が広い。

のちに私のいわば「趣味」となった問題、つまり人間の認識のプロセスについて、ここで思いがけなく触れることになったため、この問題を説明するためにとっておいたのちの適当な箇所まで待つことなく、すでにこの第一章のなかでも、私が偶然に知ることとなったある重要な格言にまつわる、少なくとも何らかの話をしておいてもよいものと考えて言うのだが、かつて地球では幾世紀にもわたり、まわりの人々から「意識的な思考者」とみなされ、かつ自分でもそのように名乗る権利を獲得しようとする大胆にも欲するようになったあらゆる人間に対しては、その責任ある人生のまだ早いうちに、人間の認識には二つの種類があることが教えられるのが習慣だった。そのひとつは思考による認識 (mentation by thought) であり、それに関与するのは、常に相対的な意味をしか持たない言語である。もうひとつの認識は、人間だけではなく、あらゆる動物に可能なものであり、これを私は「形象による認識」(mentation by form) と呼ぼう。

ほんとうならば、あらゆる書物の正確な意味はこの二つめの認識、つまり「形象による認識」によっても受け取られ、読者がすでに保有する情報との意識的な対決を経て吸収されるべきなのだが、ひとりひとりの人間のなかでのこの種の認識の発達は、地理的、気候的、時間的な条件、つまり一般的に言えば、その人間の出生と成育のプロセスが進行した環境のすべてによって左右される。

そのため、まったく同じ事柄あるいはまったく同じ考えについてさえ、人々の脳のなかでそれに結び付いている「形象」は、土地、民族、環境の違いに応じて多種多様である。それらの「形象」は、その働き、つまり連想を通じて、当人のなかに一定の体験を呼び起こし、それが各人特有の条件付けに応じた特定の画像的認識をもたらす。そしてこの画像的認識は、外面的で主観的な描写にすぎないあれこれの言葉で表現される。

同じ事柄や思想を指し示すはずの言葉が、ほとんど常に、土地や民族が異なる人々によって、まったく異なった特定の「意味」を与えられているのはこのためである。

言い換えるなら、特定の土地に生まれ育った人間の内側にはその土地に特有の影響や印象がもたらした諸結果から生じたあれこれの「形象」があり、それらは連想を通じて特定の「意味」を帯びた体験を呼び起こす。そして、もしもこの人間が、それから生じた認識や考えを彼にとつてはついに癖となり、かつ私がすでに述べたように主観的なものとなつて

しまったあれこれの言葉で表現するならば——別の環境で生まれ育った聞き手のなかではそれらの言葉はまったく別の「意味」を帯びた「形象」に結び付いているため——当然、聞き手はそれらの言葉をまったく別の意味で受け取り、理解するに違いないのである。

異なる民族に属する人々、あるいは異なる土地に生まれ育った人々が意見を交換するありさまを、その場で注意して、公正な観点から観察しさえすれば、これはいとも簡単に立証できる。

さて、私の知ったかぶりを買いかけたという、元氣あふれ、意気さかんなる諸君。私が「プロの作家」がふつうに書くようなものを書かないばかりか、それとまったく正反対のものを書くこととして、これを警告したところで、さらにもうひとつ忠告しておこう……。私の書いたこの本をさらに読み進めるのは、よくよく考えた後にしなさい。あなたの聴覚器官をはじめとする知覚器官*ならびに消化器官は、最近の地球に回っている「インテリゲンチヤの文学的言語」に対してすでに完全に自動化されているかもしれないため、この本を読むことは、あなたをとりわけ不快にさかなでずるおそれがある。そうしたときに、あなたが何を失うことになるのか、あなたには想像がおつきだろうか……。大好きなごちそうを前にしての食欲やら、近所の黒髪の女性を目にするたびに格別に「心」をくすぐられるなどというご自分の精神的特徴やらに、あなたは未練があまりではないのか。

* 訳注:「知覚器官」organs of perception。物語中で何度も使われる言葉。perceptive organ というもつと一般的な言い方に比べる。perception (摂取) の意味が強調されている。

そのようなことが、私の言葉遣いによってというよりも、正確には、私独自の思考様式によって引き起こされるかもしれないことを、これまで何度もくりかえされた前例のおかげで、私はすでに、「純血のろば」が自分のがんこさの妥当性と正当性を確信していると同じぐらい、わが存在の全体をもって確信している。

こうしてあなたにもつとも重要な警告を与えた以上、これから何が起ころうとも、私の心は安らかだ。たとえ私の書いたものから何かの間違いが生じるこゝとがあつたにしても、それは全面的に読者の責任であり、わが良心は、たとえば……故ウィルヘルム皇帝のそのように曇りなきままである。

もつともありそうなこととして、今のあなたは、私のことを、外見には恵まれているが「中身は疑わしい」若者のひとりとして思い浮かべており、さらに、新米の作家である私が、有名に、そして金持ちになろうとの思惑から、明らかにわざと、奇妙な風を装っているとお思いになっているに違いない。もし、ほんとうにそのようにお考えなら、あなたはひどく間違っている。

まず、私は若くない。私はすでに、いわば「人生の碾臼のみか、ありとあらゆる砥石まで通過する」ほどの年月を生きている。次に、私はおおむねのところ、経歴を作るため、つまりいわば「足をしっかりと地に付ける」ためにこの職業を利用しているのではない。ちなみに私が思うには、この職業に従事する者たちには「地獄」直行の候補者となるための豊富な機会が用意されている。もともとこれは、彼らが何の知識もなしにありとあらゆる「場当たり」的なものを書きちらかすことで自動的に権威を獲得し、そして彼ら自身がそれでもなくとも矮小化している人々の精神を——その総合的な効果によって——さらに矮小化させる大きな要因のひとつとなるぐらいに、みずからをみずからの《存在》において完成させることができたらの話ではあるが。

また、私の個人的経歴について言うならば、あらゆる高次の、そして低次の、さらにお望みならば、右から、そして左からの力に助けられ、私はそれとどうの昔に確立しており、しかもそれは長年にわたって「しつかりとした足」に支えられてきている。さらに言えば、それはたいへん頑丈な足で、過去、現在、未来における私の敵どもの数にも関わらず、その力があと何年にもわたって十分に持続するだろうことを、私はとりわけ確信してさえている。

そうだ。ちょうどいま、私のむこうみずな頭に浮かんだ一計についてもここで話しておくことにしよう。私のはじめての著作であるこの本をまかせる予定の印刷屋に特別に依頼して、この第一章は、本の

ページを切ることなしに、だれもが目を通すことができるような製本をさせるのだ。そうすれば、この第一章を読んで、それが普通のやりかたで書かれたものではないことを、つまり刺激的なイメージやこちよい空想を読者の精神にとりこめぬらかしかも簡単にみたらすために書かれたものではないことを知った段階で、そう望むだれもが、いちいち本屋と喧嘩しないで本を返し、おそらくはみずからが額に汗して稼いだものであろう金を返してもらうことができる。

この計画は忘れずに実行することしよう。たったいま、あるトランスコーカサス系クルド人にまつわる話をふたたび思い出したからである。この話を聞いたのは私がまだとても若かったころのことなのだが、それ以来、似たような場面にでくわすごとにこの話が思い出され、そのたびに、長く続く、打ち消しがたい同情心がこみあげてくるのを禁じえなかったものだ。あなたにもこの話をしておくことは、私にとっても、あなたにとっても好都合だろう。

これが好都合であることの最大の理由は、この話の「みそ」、あるいは最近の生粋のユダヤ人ビジネスマンが「チムツシュ」と呼ぶものを、私は自分がこの新しい職業を通じて特定の目的を達成するために用いる新たな文学形態の基本原則のひとつにすることに決めたからだ。

ある日、このトランスコーカサス系クルド人は、何かの用事で村を離れ、町へとやってきた。そして彼は、町の果物屋の店先に美しく陳列されたたくさ

んの果物を目にした。

彼の目は、店先に並んだある「果物」に釘付けになった。色、形ともに美しいその「果物」の外見に夢中になった彼は、味見したいという誘惑に耐えられず、懐中ほどんど持ちあわせがなかったにも関わらず、この機会を逃すことなく、たとえひとつだけでも、われらが《偉大なる母》すなわち《自然》のこの贈物を買ひ、味見してみようと決心した。

そして彼は、激しい熱意と、いつもの彼らしくない勇気をもって店に入ると、彼を夢中にしたその「果物」をこつこつの指で指し、店員に値段を聞いた。店員が答えるには、その「果物」は一ポンドあたり二セントだという。

自分の目にはこのうえなく美しいものとして映ったその果物がまったく高いものではなかったことを知り、われらがクルド人はまるまる一ポンド買うことにした。

町で用事を済ませた後、彼はその日のうちに、今度は家に向かってふたたび歩き始めた。

日の暮れるころ、丘や谷間を歩きながら、われらが《共通の母》すなわち《偉大なる自然》のふところに抱かれ、その魅惑的部分の外面的な美しさをいやおうなしに感受し、産業化された町ではおなじみのものとなった排出物によって汚されていない純粹な空気をわれしらず吸収するうちに、突然このクルド人は、まことにもっともながら、ありふれた意味での食物も楽しみたいという欲望を感じた。そこで彼は、道端に腰を降ろし、食糧袋から、パンといっ

しよに、その外見が彼を夢中にした例の果物を取り出すと、さも楽しげに食べた。

ところが……。なんとという恐怖……まもなく、体じゅうが燃えだした。それでもなお、彼は食べるのをやめなかった。

この不幸な二本足の生き物が食べるのをやめなかったのは、人々が遺伝的に受け継いでいる例の特殊な性向のためである。そして私は、人間のこの特殊な性向に関する法則を私の新たな文学形態の礎とすることに決めたのであり、そしてそう決めて以来、この法則は私の眼中にある目的のひとつへと私を導く「灯台」のようなものになっている。確信をもって言うに、私がここで言ったことの意味については、あなたも——もちろんあなたの理解力に応じて、そしてあなたが危険を承知のうえでこの本を読み進めるならば——これに続くいくつかの章を読むうちに、たちまち把握されることだろう。あるいは、この第一章を読み終えるまでにさえ、早くもあなたは、何かを「嗅ぎつける」かもしれない。

われらがクルド人が、《自然》のふところで食べた奇妙なごちそうによって体内に生じたなじみない感覚に圧倒されていると、村仲間のひとりがちょうどその道を通りかかった。通りかかった村仲間は、頭よさと豊富な人生体験によって知られる男だったが、彼はこのクルド人の顔が火のようにほてり、目からは涙を川のように流しつつ、それでもなお、まるでそれが自分にとって最大の義務でもあるかのようになり、一心不乱に、まぎれもない「赤とうがらし」

を食べているのを見て、次のように言った。

「何をしているんだ、このジェリコのろばめ。おまえは生きながらに焼かれてしまうぞ。おまえの本性にまったくそぐわぬ、そのとほうもない被造物を食べるのをやめるのだ」

われらがクルド人は答えて言った。

「いや、どんなことがあってもやめるものか。おらのなけなしの二セントで買ったんだからな。たとえ魂と肉体とが離ればなれになろうともやめるものか」

そして、明らかに意志堅固な男だったに違いない、このわれらがクルド人は、「赤とうがらし」を食べるのをやめなかったのだ。

私が期待するとおりなら、この話を耳にしたことで、あなたの精神には、この話に結び付いた心理的連想……あなたがたがおおまかに理解と呼ぶものをつまには現代人にももたらすような連想が、早くも生まれつつあるだろう。そして私が願っているのは、人間のこの性向——金を払って手に入れたものはない形である、最後まで使いきらずにはいられないという形で、いやおうなしに行動にあらわれるこの性向——を知りつくし、それを再三にわたって憐れんできた私自身の全体が、あるひとつの思いによって活性化されたのはなぜかをあなたが理解することである。あるひとつの思いとは、ほかでもない、いわば「食欲と精神におけるわが兄弟」であるあなたが、これまでにもあらゆるたぐいの読書に親しんでこられたとはいえ、その経験は先に述べたような「イン

テリゲンチャの言語」の範囲に留まるものでしかなかった場合、この本が便利で読みやすい普通の言葉で書かれてはいないことをあなたが知ったのは本の支払いを済ませてしまった後だったばかりに、あなたもまた、人間が持つこのような性向のために、哀れなトランスコーカサス系クルド人がその外見に惑わされて、「冗談どころの話ではない」、あの堂々たる赤とうがらしを食べ続けなければならなくなったと同じように、この本をどんな犠牲を払ってでも読み通さなければならぬはめに陥らないように、できるだけのことをしておかなければならないという思いである。

人間のこのような性向——現代人の全体には、明らかに、たびたびの映画館通いと、異性の左目をのぞきこむ機会をひとつたりとて逃さないという性癖によって、このような性向の下地となる素材が形成されているのだが——によって何の間違いも起こらないよう、私は前述したような特別な製本をさせ、この章は本のページを切らないでも自由に読むことができるようにしよう。

さもないと、返本した際に本屋はいわゆる「なんくせ」をつけ、「餌に食らいついた魚を逃がすのは間抜けの証拠」という言葉で要約される本屋の基本方針に基づいた行動をとり、すでにページの切られた本を受け取るのを渋るだろう。まったくの話、私は本屋がこのような非良心的な態度にでることを十分に予想するのだ。

本屋のこのような非良心的な態度を私に確信させる

に至ったもろもろの素材が私のなかに完全に形成されたのは、私がかつてプロの「インド式苦行者」だったころのことだ。そのころの私は「超哲学的」問題の解明に役立てるため、他のさまざまな事柄に加え、現代の本屋とその店員が買い手に本をつかませる際に、彼らの自動的精神がどのような連想のプロセスを経て発動されるのかについても熟知しなければならなかった。

このようにすべてを知りつくし、また、さきごろ私を襲った不幸な事故以来、習慣的に、そして極端にまで義理堅く、気むずかしくなった私には、くりかえして言わずにはいられない、というよりも、ふたたび警告せずには、あるいは懇願せずにはいられないのだが、どうか第一巻のページを切る前に、この第一章の全体を、とても注意ぶかく、しかもくりかえして読みなおしてさえいただきたい。

しかし、この忠告にも関わらず、あなたがこの本のもっと先のほうもお読みになりたいのなら、私にできる唯一のことは、あなたがこのうえなく旺盛な食欲をもって——あなたばかりではなく、あなたの身の回りの方々の健康のためにも——あなたが、お読みになったものごとごとく消化されるよう、わが「本物の魂」をもってお祈りすることだけである。

わが「本物の魂」と言ったのは、最近ヨーロッパに暮らすようになってから、人間の内的生命を指すとき以外には使われるべきではない神聖な言葉を、あらゆる適当な、そして不適當な機会にのぞんで空しく口にする輩にしばしばでくわすために、すでに

宣言したとおり、現代人とは違って理論的なものばかりではなく、実践的なものも含めた、幾世紀にもわたる民衆の知恵を体现するもろもろの格言の信奉者である私は、この場合では「ローマにあつてはローマ人に従え」という格言にのっとり、会話のなかで神聖な言葉を空しく口にするという、ここヨーロッパでの習慣にあえて逆らわず、それでもなお、聖モーゼの神聖なる唇より発せられた「神聖なる御名を空しく口にするべからず」という戒律にそむかないようにするため、現代における「ほやほや」の流行言語である英語を利用することに決め、それ以来、もし必要とあらば、わが「英語の魂」をもって誓うことにしているからである。

この流行の言語によると、この「魂」という言葉は、足の裏を意味するソウルという言葉とほとんど同様に発音され、つづられさえもするというのが、この話のポイントである。

私の本をすでに半分買いかかっているあなたがこれについてどうお考えになるかは知らないが、私の独特の本性は、われらが共通の父・創造主によって格別に愛された、人間のなかでもっとも高次の部分だが、現代文明に属する人々によって、それが実際に何であるかをほとんど理解されないまま、人間のもつとも下にあるもつとも汚い部分と同一視されていることの表明であるこの件に関して、精神によるいかなる抑制をもって打ち消しがたい激しい怒りを感ぜずにはいられない。

さて、「哲学者きどり」はもうやめにしよう。そし

て、他のさまざまな目的に加えて、一方では読者の眠たげな思考を揺りさまし、他方では読者にあることを警告するように運命づけられたこの最初の章での本来の仕事に戻ることにしよう。

私はすでに、これからの叙述の計画なり順序なりを頭のなかでまとめてあるとはいえ、正直なところ、私の意識はまだ、それが紙の上でどんな形になるのかを捉えられずにいる。しかし、早くも私の下意識は、それが全体としていわば「辛い」ものとなり、あのトランススコーカサス系クルド人に赤とうがらしが及ぼしたと同じ影響をあらゆる読者の全体に及ぼすであろうことをはつきりと予感している。

われわれありふれた人間の代表であるこのトランススコーカサス系クルド人の物語に親しんでもらったところで、私がこれから執筆を予定しているあらゆる本の前書きのようなものであるこの章をさらに書き進める前に、あなたに早くもこれを打ち明け、あなたの「純粋な醒めた意識」にお知らせしておくのが私の義務ではないかと思うのだが、私は、警告のために書かれたこの章に続く部分で私の思考を展開するにあたり、独特な順序といわゆる「論理的対峙*」を用いることにより、真実を告げるもろもろの概念の本質が、いわゆる「醒めた意識」(多くの人は無知ゆえに、これを本物の意識と取り違えるのだが、私の考え、ならびに私の実験が証明するところによれば、これは虚構の意識にすぎない)から、ふつう下意識と呼ばれるものへと、いわば自動的に引き渡されるようにするつもりである。私に言わせる

なら、この下意識こそが人間の本物の意識である。そして、もろもろの概念の本質がこの下意識に伝達されたなら、それらは、本来ならば個人の全体のなかで日常的に進行するべきである変容のプロセスを自動的成就させ、本来ならば各人が意識的に精神を用いることで獲得するべき結果、すなわち一つまたは二つの脳しか持たない生き物*とは違った存在としての人間にふさわしく、そのような存在としての人間が手に入れてしかるべき結果をもたらすのである。

* 訳注：「論理的対峙」 logical confrontation は「対決による結合」 confrontative association とともに、「三の法則」(トリアマジカム)に従った特定の形式で材料と材料をぶつけあわせ、そこから理解を引き出すプロセスに関連した表現。詳細は四十六章で説明される。「論理的」の「論理」とは「三の法則」のロジックを指すと思われる。

** 訳注：「一つまたは二つの脳をしか持たない生き物」は虫や動物を指す。

私は必ずこのような書き方をしよう。そして、すでに述べたように読者の意識を目覚めさせるために書かれたこの章が完全にその使命を果たし、私に言わせれば虚構のものにすぎないあなたの表層の「意

識」だけではなく、本物の意識にまで達するように仕向けよう。言うなれば、あなたのいわゆる下意識が、生まれてはじめて、能動的に考えることをあなたに強いるようにさせるのである。

遺伝や教育の如何を問わず、どんな個人の全体のなかにも、機能においても作用においても互いに共通のものを何も持たない二つの独立した意識が存在する。そのひとつは、偶然に生じた、あるいは他者が意図的に提供した多種多様な印象を機械的に吸収することで形成された意識であり、これらの印象のなかには、じつのところ何の中身もないさまざまな言葉の「音色」も含まれている。もうひとつは、遺伝によって受け継がれ、すでに各人の全体のなかの相応の部分と混ざり合い、いわばすでに「確固たるもの」となったもろもろの結果、ならびにそれらの結果と「新しい体験から生じた結果と」の対決による結合の成果から形成された意識である。

いわゆる「下意識」とは、ほかでもない、人間のこの第二の意識の内容物と、この第二の意識の働きそのものの両方を指している。この第二の意識は、遺伝によって受け継がれ、人のなかで物質化したもろもろの材料、ならびに各人がそれらの材料と意図的に向かい合うことで生み出したものから構成される。そして、例外的な好条件のなかで長年にわたって進められた実験的研究のおかげで私が到達した確信によれば、人間の心身全般を支配しているのはまさにこの下意識である。

私のこのような確信も、あなたにはまだ、病める

精神の産物としか思われないのであろうが、それでもあなたもお察しのとおり、私はいま、この確信ゆえに、この第二の意識を無視できない。よって私は、わが本質の命じるところに従って、自分が執筆を予定しているあらゆる本、ならびにそのすべての前書きであるこの章を書き進めるうえで、私の書くものが読者のこの二種類の意識の雑多な中身に接触し、私の目的にかなったやりかたでそれらを「揺さぶる」ように計算しなければならぬ。

このように計算しながら書き進めるにあたって、何よりも先に、あなたの「虚構の意識」に対して言っておかなければならないのだが、私の準備的年代のいくつかの時点で私自身の全体のなかに結晶化された三つの奇妙な素材のせいで、私は、たまたま私に出会った人たちの内側に彼らが彼ら自身の深い認識や信念だと思っている事柄に関する「混乱と疑い」を引き起こすという、じつに独特の才能を身に付けるに至っている。

はあ……。すでに私には、あなたの「虚構の意識」——もっともあなたにとっては「本物の意識」——のなかで、あなたが叔父さんや母親から受け継いだおもだった素材のすべてが、まるで「盲目の蠅」のように混乱しだしたのを感じる事ができる。それらの素材はすべて、どんな場合にも少なくとも、あらゆるものに対する好奇心をかきたてる性質のものであり、たとえば今の場合では、あなたは、いわば新米の作家であって、新聞に名前の出たことなど一度もない私のような者が、どうしてこのような独

自の才能を身に付けることになったのかをできるだけ早くお知りになりたいのであろう。

心配御無用。それがたとえ「虚構」の意識においてのみのことだろうと、あなたにこのような好奇心が生まれたことを、私は個人的にたいへん好ましく思う。人間として恥じるべきこのような好奇心も、ときによっては、「虚構の意識」から人間の本性へと引き渡され、そこで価値ある衝動に、つまり知識への衝動になることさえもあるからだ。しかも、何かの拍子に現代人がみずからの注意を何かの対象に集中させることがあったならば、そのときにこの種の衝動は、当人がその対象の本質をより明確に認識し、より詳細に理解することを助ける。よって、すでに経験からこのことを知っている私は、この時点であるに生まれた好奇心を喜んで満たしてあげようと思うのだ。

さあ、では耳を傾けて私の期待に答え、私をがっかりさせないように努力していただきたい。《客観的正義》が運行される《天の裁きの庭》の二つの聖歌隊の一部のれつきとした方々、そしてこの地球でも、まだきわめて少数とはいえ一部の方々が「嗅ぎつける」こととなった、わが独特の個性は、すでにお話ししたとおり、準備的年代において私のなかに後天的に形成された三つの特殊な素材の上に築かれている。そのうち最初に形成された素材は、そもそものはじめから、私のすべてを突き動かす心棒のようなものとなり、その後形成された二つの素材は、最初の素材を成長させ、完成に導くための「活力の源」

とても呼ぶべきものとなった。

第一の素材が形成されたのは、私がまだ「小さなふとつちよ」にすぎなかったころのことである。そのころ、今は亡きわが愛する祖母はまだ生きており、百いくつかの年齢だった。

私の祖母——わが祖母が天の王国を勝ち取らんことを——が死の床にいたとき、私の母は、当時の慣習に従って、私を祖母の寝台のかたわらに連れていった。私が右手に接吻すると、今は亡きわが愛する祖母は、その死につつまある左手を私の頭の上に置き、ささやき声で、しかしとてもはっきりと、次のように言った。

「私の最年長の孫であるおまえに言う。私のきびしい遺言の言葉をよくお聞き。人生において、他人がするようなことをけつしてはいけないよ」

こう言うと、祖母は私の鼻柱をみつめ、私が明らかに混乱し、言われたことをぼんやりとしか理解していないことを見て取ると、多少怒ったように、命令するような口調で次のように言った。

「何もせずにただ学校に行きなさい。さもなければ、だれもしないことをしなさい」

こう言い終えると、祖母は一瞬のためらいもなく、身の回りのすべてのものに対するあからさまな蔑みの衝動と堂々たる自意識をもって、《かの真実なる》大天使ガブリエルの手に、その魂をゆだねた。

これをお話しするのがあなたの関心にかない、さらに教訓的でさえもあると思うのだが、そのときこの出来事は非常に力強い印象を私に与えたの

で、突然私は身の回りのどんな人間の存在にも耐えられなくなり、私の生まれた原因のそのまた原因の死すべき「惑星的身体」が横たわる部屋を抜け出すと、そつとだれにも気づかれぬようにしながら、われらが「衛生家」たち、つまり豚たちに食べさせる糠とじやがいの皮が四旬節のあいだ貯えられている納屋に隠れると、食物も飲物もなしに、渦巻き、混沌とした想念の嵐（もつとも、私にとつてさいわいなことに、当時の私の子供じみた頭のなかには、まだほんの限られた数の想念しかなかったのだが）に囲まれたまま横たわった。しかしやがて、墓地から帰ってきた母が私のいないのに気がつき、あたりを空しく捜しまわったあげくにすすり泣く声が私をいわば「いたたまれなく」すると、私はたちまち納屋から駆けだし、まず立ち止まると、どうしたわけか、両手を広げたままもじもじし、それから母に走り寄ってスカートにしっかりと抱きつくつと、足を踏み鳴らし、なぜであろう、となりの地主が飼っているらばのいななきを、われ知らずまねていた。

なぜこの一件がこれほど力強い印象を当時の私に与えたのか、そしてなぜ私がほとんど自動的にここで述べたような奇妙なふるまいをしたのか、私は今でもわからずにいる。ただ、近年になってから、それもとりわけ一年のなかで「懺悔節」と呼ばれる時期に、私は、主としてその理由を見いだすために長々と考えるようになった。

これについて考え、私がたどり着いた唯一の論理的説明は、この神聖なる一幕が演じられ、その後の

私の人生の全体にとつてとつなく大きな意味を帯びることとなったその部屋の大気が、キリスト教のどんな側面の信奉者にとつても親しみの深い「アトスの僧院」から持ち帰られた特殊な香のにおいで満たされていたことを、その単純な理由と見なすものだった。これが本当の理由かどうかはわからないが、以上はあからさまな事実である。

この一件からしばらくの間は、私の全般的な状態に何も変わったことは起きなかった。もっとも、私とその間にいつもよりも多めに足を宙に向けて歩いた、つまり逆立ちして歩いたという事実をこの一件と結び付けて考えることは可能かもしれない。

私をはじめて周囲の人々のふるまいとは明らかに調和しないことをしたのは、祖母が死んでちょうど十四日目のことだった。もっとも、その行為は、私の意識ばかりか、下意識さえもまったく関与することなしに為されたのである。その日、私の家族と親類縁者の全員と、生前だから愛されていた私の祖母を尊敬していたあらゆる人々は、慣習にのっとり、墓地に眠る祖母の死すべき身体のかたわらで、「鎮魂式」と呼ばれるものを取りおこなうために集まっていた。そのときのことである。私は突然、世間的な地位を問わず何らかの道徳規則——具体的な規則だろうと精神的な規則だろうと——を多少なりとも身に付けている人間が例外なしに習慣としていることに反し……つまり圧倒されたかのように立ちつくし、顔には苦澁を装い、さらにできることなら涙さえ浮かべるかわりに、何の脈絡も理由もなく、

墓のまわりを踊るようにスキップし、次のように歌いだしたのである。

わが祖母を聖者ととも休ませよ。

今、その爪先は天指したれば。

おい！ おい！ おい！

わが祖母を聖者ととも休ませよ。

今、その爪先は天指したれば。

……等々……

そして、これをきっかけにして、私の全体には、どんな「さるまね」——身の回りの人々が自動的にやっている日常的な行為の模倣——をするにあたって、常にそして全面的に、それを他人とは違ったやりかたでしようとする「抵抗しがたい欲求」を生み出す「何ものか」が生まれた。

そのころの私がしたことには、次のようなものがある。

たとえば、私の弟や妹たち、それに近所から遊びにきた子供たちがボールを高く放り投げて右手で受け止める練習をしていたとすると、私は同じ目的のために、まずボールを強く地面に投げつけて跳ね返らせ、そして自分ほとんどんぼがえりを打った後に、左手の親指と中指だけでそれを捕らえるのだった。また、他の子供たちが頭を下にして丘の斜面を滑り降りれば、私は、そのころ子供たちが「尻から先に」と呼んでいたやりかたで滑り降り、しかも、くりかえすたびにもっと上手に滑ったものだ。あるいはま

た、私が他の子供たちといっしょにいろいろな「ア balan 菓子*」をもらったとすると、他の子供たちは、明らかに、味覚の喜びを長引かせようとして、まず全体をなめまわしてから口に入れるのだったが、私の場合には、まず、くまなく匂いをかいだ後、たぶん耳にまであてて熱心に聴覚を傾け、そしてほとんど無意識にながら、それでも真剣に、「これ、あれ、その仕事して、死にそうになるまで食べてはならぬ」と、自分に向かってつぶやき、調子をあわせてハミングしながら一口かじり、味見もせず飲み込んでしまうといったふうだった。

* 訳注：「アバラン菓子」はアルメニアのアバラン地方の菓子

今は亡き私の祖母の遺言にさらなる力を与え、それを完成へと導く「活力の源」となった、先に触れた二つの素材のうち、第一のものが私に生まれるきっかけとなった出来事が起こったのは、私が小さなふとつちよから「若いぎども」のひとりへと成長し、早くもよくいわれるような「すばらしい外見と疑わしい中身の若者」の候補になりかかっていたころである。

その出来事は、《運命》ご自身の手によって特別に準備されたものとも思われる、次のような状況のものに起こった。

ある日のことである。私は自分と似たような何人もの少年たちといっしょになって、近くの家の屋上

に鳩の尻を仕掛けていた。すると突然、それまで私に覆いかぶさるようにして私のすることを熱心に観察していた少年が言った。

「ぼくの思うには、馬の毛で作った輪に鳩の親指が絶対に引つかからないように工夫しなければだめなんだ。動物学の先生がこのまえ教えてくれたように、鳩の活動中にその余力が貯えられているのがこの親指だからさ。だからもし、この親指が輪にかかったりしたなら、もちろん尻などは簡単に壊されてしまうだろうよ」

ところで、ちょうど私に向かい合う格好で身を乗り出していた別の少年の口からは、しゃべるたびに大量の唾が四方に飛び散るのだったが、彼は、最初の少年が言ったことに反論し、このときも大量の唾とともに、次のような言葉を吐き出した。

「黙りやがれ、このホッテントットとのあいのこ野郎め！ その先生やらと同様、おまえはなんというできそこないなんだ。かりに鳩の最大の身体的力が親指に貯えられているというのがほんとうだったとしても、それだったらなおさらのこと、その親指が輪にからまるようにするべきじゃないか。それでこそはじめて、われわれの目的において、つまりあわれな鳩どもを捕まえるうえで、例の柔らかくて捉えどころのない『何ものか』のあらゆる所有者にふさわしい頭脳の特質に何らかの意味が生じてくるというものだ。つまり、法則に従って必ず周期的に起こる『心身の変化』が、この目立たない変化に影響する外部の要因の作用によって引き起こされると、

心身の活動全般に含まれる他の活動を活性化するために起こるこのちょっとした『周期的混乱』は、例の捉えどころのない『何ものか』がそのなかでごく小さな役割を果たすにすぎない心身の活動全般の重心がいつもとは違った箇所に一時的に移ることを即座に可能にするのであり、しばしばその結果、心身の活動全般にばかげたまでに奇妙で意外なことが起こるのだ」*

* 訳注：「意識の持ち主なら考えてみるべし。(たとえば人間でも) 外部的要因(月)の影響を受けて意識の関与なしに**周期的**に心身に起きる外見的には目立たない現象によって心身全体の重心の位置が変わり、ふつうでは考えられないようなばかげたことを起こすじゃないか」。やや危険な意味を含んだ婉曲なジョークによって、後から物語のなかで扱われるいくつかのテーマを暗示している。英語でこれを読む読者の場合、period という言葉に隠された意味から、物語の主要なテーマである「月の影響」ならびに「順類の周期的破壊」(戦争)の話へと連想が働く。

この最後の言葉を少年は大量の唾といっしょに発音したため、私の顔は、ドイツ人がアニン染料用に発明した「噴霧器」、それも「模造品」ではないやつの一斉攻撃にさらされているかのようにだった。

それは我慢の限界を超えていた。そこで私はしゃがんだ姿勢のまま少年に向かって突進し、みぞおちに力いっぱい頭突きをおみまいすると、彼を一瞬にして「意識不明」にした。

人生のさまざまな局面で観察される驚くべき偶然の一致と私が見なすものについてこれからお話しすることがあなたの精神にどのような結果をもたらすことになるのかを私は知らず、知りたいたとも思わないのだが、私自身の精神にとって、ここに見られる偶然の一致は、私の青年時代に起こったこの一事件がただ偶然に起こったものではなく、何らかの外的な諸力によって意図的に創造されたものだった可能性を如実に示す格好の材料である。

ここで偶然の一致というのは、この必殺技をトルコから来たギリシャ人の僧侶から私が徹底的に仕込まれたのはそのわずかに二、三日前だったということである。そのギリシャ人は、その政治的信念ゆえにトルコ人から迫害を受け、やむをえずトルコを逃れて私の町にたどりついたところを、両親が私の現代ギリシャ語の教師として雇ったのだった。

彼がどのようなものを彼の政治的信念や思想の土台としていたのかを私は知らないが、このギリシャ人僧侶とのどのような会話のしほしほにも……たとえば古典ギリシャ語と現代ギリシャ語との間の感嘆詞の違いについて私に説明しながらも、彼が一刻も早くクレタ島におもむき、そこで真の愛国者にふさわしく行動することを夢見ているのがじつにあからさまにうかがわれたことを私はとてもよく覚えて

いる。

ところで私は自分の必殺技の威力を目のあたりにして、正直なところ、恐れおののいた。そのような部位への打撃によって引き起こされる身体の反応についてまったく知らなかった私は、てっきり彼を殺してしまったものと思ひ込んだからだ。

私がおそらくな恐怖におびえていると、私のいわゆる「護身術」の最初の犠牲者となった少年のいとこにあたる少年が、この一件を見てとるや、一瞬もためらうことなく、そして明らかに「血のつながり」と呼ばれる感情に圧倒されて、すぐさま私に飛びかかる、拳で顔面をしたたか殴りつけた。

この打撃から、私はいわば「星がちらつく」のを見、同時に口のなかで、鶏千羽分の人工飼料を詰め込まれたかのようにいっぴいになるのを覚えた。

しばらくして、この二つの奇妙な感覚が私のなかで収まると、私は実際、口のなかに変なものがあることに気づいた。指で取り出すと、それは奇妙な形をした大きな歯にほかならなかった。

私がおそらくともない歯に見とれていると、他の少年たちもみんな私を取り囲み、同じく大きな好奇心と奇妙な沈黙をもってこの歯を見つめた。

大の字になっていた例の少年もこのときまでに回復し、立ち上がると、まるで何も起こらなかったかのように、いっしょになって歯を見つめていた。

この不思議な歯には七本の根が生えていて、それぞれの先端には血のしずくが残されていた。そして、それぞれの血のしずくをおして、白光を形作る七

つの色がひとつずつ、まぶしくはっきりと輝いていた。

「若い子ども」にとっては珍しいものだったときの沈黙が破られた後、ふたたびいつもの大騒ぎが始まった。そしてこの大騒ぎのなかで私たちが決めたのは、抜歯の専門家だった床屋のところへ直行し、どうしてこの歯がこんな奇妙な形をしているのかを聞いてみようということだった。

そこで私たちは屋上から降り、床屋へと向かった。「今日の英雄」である私を先頭にしておく。

床屋は歯を一見して、これはたんなる「知恵歯」、すなわち「親知らず」にすぎないと言った。はじめと実母の乳だけで育てられ、かつ、初見においておぜいのなかから自分の父親の顔を見分けることのできた男の子はみな、このような歯を生やすのだという。

この出来事のおかげで私の「知恵歯」は哀れにも完全に犠牲になってしまったのだが、この出来事が私に及ぼしたあらゆる影響の総合的な作用のため、それ以来、私の意識は、今は亡き私の祖母——神よ、その魂を祝福したまえ——が私に遺したいたましめという言葉の本質中の本質を、あらゆることとの関連において着実に吸収していった。しかも、私の家は現代文明の中心地のいずれからかはるかに隔たったところにあつたので、当然、「正規の歯医者」に歯の抜けた穴を診てもらふことはできなかったため、この一件以来、その穴からは慢性的に「あるもの」がにじ

みだすようになり、そしてさらに、パリのモンマルトルのナイトクラブでしばしば顔を合わせるうちに私のいわゆる「親友」となったある高名な気象学者が最近私に説明してくれたことによれば、この「あるもの」には、あらゆるたぐいの不可解な「事実」への興味と、そのような「事実」の根本原因を明らかにしようとする傾向を生み出す特性があるため、遺伝によって私自身の全体に伝えられたものではないこの特性は、ひとりでにだんだんと私を導き、私をついには、私がしばしば目にするようになったありとあらゆる怪しい現象の解明における専門家とまでしたのである。

この出来事をきっかけに私のなかに新たに形成されたこの特性は、私がおそらく「もちろん「万物の支配者・非情なるイエロパス」すなわち「時間の経過」のおかげで——先に描写したような若者に変身してからは、私にとって、常に意識の炎に燃える、消えることのない、真正正銘の炉のようなものとなつた。

さて、先に触れた「活力の源」のうち第二のものは、この地球に生きるわれわれの間で起こったある出来事について偶然に耳にしたことが私に与えたさまざまな印象の総合的な影響であり、それはわが愛する祖母の遺言と私自身を構成するあらゆる素材との間に完全な結合をもたらした。アラン・カルデック氏が「極秘」の降霊会で明らかにしたことによれば、私が耳にしたこの出来事は、われらが《広大な宇宙》の地球を除く全惑星に生まれて暮らすわれ

われに似たあらゆる生き物が大切に「生の原則」のひとつとしてのちに有名になった原則が生まれるきつかけを作った。

この新たな「全宇宙的な生の原則」は、次のような言葉になっている。

「どうせぱっとやるなら郵便代もこみで」

今ではすでに宇宙的なものとなったこの原則が生まれたのは、そこでああなたが生まれたのみならず、薔薇の花園に安穩と暮らし、しばしばフォックスストロットなどおやりになる惑星なのだから、私には、この宇宙的な原則の起源に関する詳細の一部を明らかにする手持ちの情報をあなたから隠したままにしておく権利はないであろう。

前述したような新しい傾向、つまりあらゆる「事実」の本当の原因を明らかにしたいという不可解な情熱が完全に私の本性の一部となってからまもなく、私はロシアの中心、モスクワの町をはじめ訪れたのだが、私はこの町で私の精神的欲求を満たすものをほかに何も見つけることができず、ただロシアに伝わる民話やことわざの調査だけに精をだしていた。そのころのことである。偶然によってか、あるいは私の知らない何らかの法則から客観的に導かれた結果としてか、私はたまたま、次のような出来事について知ることとなった。

昔あるとき、周囲の人々の目には一見、ただの商人にしか見えなかったあるロシア人が、何かの用事で故郷のいなか町を離れ、ロシアの第二の首都、モスクワに行かなければならなくなった。そしてその

とき、彼のいちばんお気に入りの子（それはその子が母親だけに似ていたからだ）は、ある本を買ってきてくれるように、彼にお願いした。

意識せずして「全宇宙的な生の原則」の偉大な作者となったこの商人は、モスクワに着くと、昔も今も変わることのない当地での習慣にもれず、友人のひとりといっしょに、本場の「ロシアン・ウォッカ」で「泥酔」した。

呼吸器官を備えた二本足の生き物の、現代における最大の集団の成員であるこのふたりが、この「ロシアの精華」の相当数のグラスを空け、そして、会話を始めるうえで昔からの習慣に従い、まず最初の話題として、いわゆる「公共教育」について議論するうちに、突然われらが商人はこの話題からの連想で、愛する息子からのお願いを思い出し、そこでさっそく、友人とふたりで本屋に行くことにした。

商人は、捜していた本のことを本屋で尋ね、そして店員から渡された本に目を通すと、その値段を聞いた。

店員によれば、その本は六十コペイカとのことである。

表紙に印刷された値段がたったの四十五コペイカであることに気がついた商人は、まず、ありふれたロシア人には珍しく、奇妙なふうに考えこみだした。そして両肩をちよつといからせ、柱のように直立し、番兵のように胸を突き出すと、少し間をおいてから、とても静かに、ただしとても偉そうに言った。

「ここに四十五コペイカと書かれているではない

か。どうしておまえさんは六十コペイカも取るのかね」

すると店員は、セールスマン特有のいわゆる「お世辞っぽい」顔をして、本自体はおっしゃるとおり四十五コペイカなのでございますが、六十コペイカでお売りしなければならぬのは、郵便代の十五コペイカが加算されているからでございます、と言った。

店員のこのような説明を聞いた後に、この二つの互いにまったく相容れない、しかしいかにも簡単に相容れるものともなりそうな事実によって混乱したわれらがロシア商人の内側で何ががはじまりを告げたことは、目にも明らかだった。彼は天井を見上げ、今度はまるで、ヒマシ油カプセルを発明したイギリスの教授のように考え始めた。そして突然、彼は友人のほうに向きなおると、あの名言を……つまりその本質においてまぎれもない客観的真理を凝縮させたのに格言としての性格を帯びることとなった例の名言を地球ではじめて口にしたのである。

彼がそのとき友人に向かって吐いた言葉は次のとおりである。

「まあいい。気にするんじゃないよ。本は買おう。どっちにしたところで、今日はぱっとやるんだからな。『どうせぱっとやるなら郵便代もこみで』さ」

ここで話したすべてのことを私を知るやいなや、不運にも生きながらにして「地獄」のあらゆるメニューを味わうように運命づけられたこの私のなかで、それ以前にもそれ以後にも味わったことのない、と

ても奇妙な何かが始まり、それはかなり長く続いた。それはあたかも、複数の源泉から私のなかに日常的に生じるさまざまな想念や感慨のすべての間で、ヒヴア地方の現代の住民らがよくやるような「競馬大会」が始まったかのようだった。

それと同時に、私の脊椎の全域を、強烈な、ほとんど耐えがたいまでのかゆみが襲い、太陽神経叢のちようど真ん中にも、やはり耐えがたいまでの激痛が始まった。しばらくたつと、突然この二通りの相互に引き立てあう感覚は、「空気がバターを作る方法の発案者たち」を名乗る同胞団への大いなる入門の儀式を受けたときを除けば、のちの人生で二度と味わったことのない深い平和な状態によって置き換えられた。そしてこのような状態のなかで、いわゆる「私」——すなわち古代の一変人（昔も今と同じようにそのような変人は「学者」と呼ばれていたのだが）の定義によれば「思考／感情／自動的本能の働きの質に左右される比較的に移ろいやすいもの」、古代アラビアの有名な学者マーレツールの定義、つまりのちの歴史の流れのなかでやはり有名なギリシャの学者クセノフォンに引用され、別の文脈のなかでくりかえされた定義によれば、「意識／下意識／本能の複合的所産」として人の内側に生じる「正体不明のもの」——が、眩惑された注意力を内側に向けてると、それがとてもはっきり捉えたのは、のちに「全宇宙的な生の原則」となったこの格言を構成する言葉のひとつとつが、私のなかで特殊な宇宙物質へと変容を遂げたこと、そしてこの物質は今亡

き私の祖母の遺言によってすでに長いあいだ私のなかに結晶されていた数々の素材と混ざり合い、それによってそれらの素材を「何ものか」に変えたこと、そしてこの「何ものか」が私の全体のすべてをとうとうと流れ、私自身の全体を構成するすべての原子のひとつひとつに永遠に宿されたことである。そして次に、わが不運なる「私」が痛感し、あきらめの衝動とともに意識した悲しい事実は、これからの私は、常に何事においても例外なしに、遺伝の法則に従ってでもなく、環境からの影響に従ってでもなく、偶然がもたらした互いに異質な三つの外的要因によって私自身の全体のなかに生み出された傾向にのみ従ってふるまわずにはいられなくなったということである。この三つの要因のうち最初のもは、特に私が望んだわけでもないのに私の出生の原因のそのまた受動的原因となった人間の遺言であり、第二の要因として私が悪童に歯を叩き出されたのは、そもそもが主として他人の「よだれっぼさ」のせいであり、第三の要因に至っては、私のまったく見ず知らずの「モスクワ産」の商人が酔って口にした言葉なのである。

この「宇宙的原则」を知る前にも、私はあらゆるふるまいを、私と同じ惑星に生まれて無気力な生を営む他の二本足の動物たちとは違ったふうにしてきたかもしれない。しかし、それまでの私は、それをもっぱら自動的に、たまたまそうでないときにも半意識的にしてきたにすぎなかった。ところが、この出来事をきっかけとして、私は意識的に、しかもわ

れらが《共通の母》すなわち《偉大なる自然》に対する自分の義務を正しく立派に果たしているという自己満足と自己認識が交じり合った本能的衝動をもってそれをしようになった。

たしかに、この出来事が起こる前にも、私はすでに、すべてを他人とは違ったふうにしてきたものではあったが、ここで強調したいこととして、そのころの私のふるまいは、まだ周囲の人々の目に余るほどのものではなかった。ところがこの生の原則が私の本性に吸収された瞬間から、私のあらゆるふるまいは、何かの目的をもった意図的なものはいうまでもなく、たんなる「怠惰のきまぐれ」によるものでさえもがことごとく活性化され、私のふるまいに直接的または間接的に注意を向けた私と同類の生き物たちはみな、知覚器官に「魚の目」を患うようになった。それと同時に私もまた、自分のあらゆるふるまいにおいて今は亡き私の祖母が遺したいましめという言葉その極限にまで展開するようになり、そして私は何か新しいことを始めるときや何かの転機——もちろん大規模なものを指して言うのだが——を迎えたときには欠かすことなく、心のなかで、あるいは口に出して次のように唱える習慣をひとりりで身に付けたのである。

「どうせばつとやるなら郵便代もこみで」

さて、たとえばいま、私はみずから望んでではなく、私の人生に偶然もたらされた奇妙な状況から生じたもろもろの原因のために本を書いているのだが、私はそうするにあたって、人生そのものが作り出

した数々の驚くべき巡り合わせを通じて、確かに確固たるものとなり、わが全体を構成する原子のひとつひとつと混ざり合うに至ったこの原則に従わざるをえない。

この精神のおよび本能的な原則に今回も従えるよう、私はまず、次のようにしよう。大昔から現在に至るまでのあらゆる作家の習慣として、ふつう本の主題として選ばれるのは地球でかつて起こった、あるいは現に起こりつつあると仮定された出来事なのだが、私はあえてこの習慣に逆らい、宇宙全体にわたる出来事を著作のなかで扱うことにする。この場合にもまた、「引き受けるときはすべてを引き受ける」、つまり「どうせぱっとやるなら郵便代も「みで」である。

どんなありふれた作家でも、地球の範囲内のことなら書ける。だが私はありふれた作家ではない。

私が自分自身を、客観的に見るならば「取るに足らない惑星」である地球に閉じ込めることなどできるだろうか。私には他の作家がふつうに取り上げるような主題に沿って書くことなど、とてもできない。われらが学者たちもその可能性を指摘しているような現象が突然ほんとうに起きるかもしれないから……というのがその唯一の理由だったとしてもある。つまりわが愛する祖母がもしもそれを知ったとしたら、彼女はこうなってしまうだろう。とりわけ今では他人の立場でものを考えることにすっかり熟練した私が、祖母を理解したうえでいうに、彼女はよく言われるように一度だけではなく、何度も何度も墓

のなかで寝返りを打ち、まるで「アイルランドの風見鶏」のようになってしまおうことだろう。

だが読者よ、心配しないでくれたまえ。私はもちろん地球のことにも触れるつもりだ。ただし、そうするにあたって何のえこひいきもせず、この比較的ちっぽけな惑星とその上で起こるあらゆる出来事が、われらが《広大なる宇宙》のなかで実際に占め、そしてその占めることが——もちろん私の手助けによっても理解されるであろう位置について、どんな誤解も生じないようにしよう。

また当然ながら、私の本の「登場人物」としても、地球におけるどんな身分の、どんな時代の作家も好んで描き、ほめ讃えるようなタイプ……つまり何かの間違いでこの世に生まれ、いわゆる「責任ある年代」に達するまでの形成期を通じて、神の似姿すなわち人間にふさわしいものをなんら獲得せず、そのかわりに、生まれてから死ぬまでたゆむことなく、「すけべさ」、「だらしなさ」、「惚れっぼさ」、「意地きたなさ」、「臆病」、「ねたみぶかさ」などという、人間として恥じるべき数々の悪癖のみを内側に育んでやまない、ありふれた人間たちを選ぶことはできない。

私が登場人物としたいのは、あらゆる読者が全身全霊をもってこれは本物であると、いわば「いやおうなし」に感じ取り、さらにどんな読者の内側にもこれはたんなる「だれかさん」ではないと思わずにはいられなくなるだけの素材を結晶化させずにはい

ないような人物である。

この数週間、私は自分の傷ついた肉体を寝台に横たえながら、これからのあらずじを頭にまとめ、それを記述するうえで形式と順序を考えた。そして私の本の第一集の主人公として私が選んだのは——あなたに想像できるだろうか——大魔王ベルゼバブ様なのだ。われわれの生活の外面を支配するに至ったありとあらゆる異常な条件のせい、そして特に、われわれの生活に深く根付いた悪名高い「宗教道徳」のせいでああなたがたの内側に例外なく形成されているはずのもろもろの素材の総合的な作用により、私のこのような選択が、すでに自動的なものとなって、いる多種多様な否定的衝動を引き起こしかねない連想をあなたがた大多数の精神に最初の最初からもたらすかもしれない、それによってあなたがたの内側には私個人に対する形容しがたい反感を生み出す素材が形成されずにはいないことを知ったうえでのことである。

だが待ちたまえ、読者諸君。

もしもあなたがこの「警告」にも関わらず危険を承知で私の本のこれから先の部分にも親しみ、公正不偏の理解に向けての衝動を常に保ちつつその内容を吸収し、私が解きあかすことに決めたまさまな問題の本質中の本質を理解しようと決心されたのなら、私はいわゆる「気さくさと信頼に基づいた相互関係」が確立されていないことには良いものを良いと認めてすなおに受け入れることさえできないという、人間の精神に固有の特徴を考慮して、ここで

もうひとつ、打ち明け話をしておくことにしよう。

つまり、よりにもよって、あなたの心眼にお映りのままの恐るべきベルゼバブ氏をこの本の主人公として選ぶべしと私自身の全体に要求するに至ったものもろの素材が私の意識の相応の領域に凝縮されたのは私のなかでどのような考えが進行したためであるのかを、包み隠さずお話しするのだ。

主人公のこのような選択には巧妙な下心が隠されていないわけではない。これはつまり、もしも私がこのような形で彼に注目してあげるなら、彼のほうでも疑いなく——私にはもうこれ以上、疑う気力がないのだが——私の書こうとしている本のなかでいかにしても私を助けようとするので、感謝の気持ちであらわしてくれるに違いないという論理的仮説に基づく下心である。

ベルゼバブ氏とわれわれとは、いわば「種ちがい」であるとはいえ、彼もまた考えることができ、さらにもっとも重要なこととして——これは、有名なカトリックの僧侶、フーラン修道士の論文のおかげで、私が遠い昔に知ったことなのだが——彼は尻尾をカールさせており、私が自分の経験から確信するにはカールが天然に生じるわけはなく、それはさまざまな意識的操作によってのみ得られるものなのだから、読書によって私の意識に形成された各種のインテキ占いにおける「まっとうな論理」に従って結論を下すに、ベルゼバブ氏もかなりの見栄っぱりであり、彼の名を宣伝してくれる私のような人物を助けたいのは彼自身にとってきわめて不都合ではないかと思

うのである。

われらが高名なる比類なき教師、ムラ・ナスレディンが次のようにくりかえすのも、それなりの理由があつてのことである。

「どこに住もうと、手をあぶらで汚さないことは「わいろを使わないことには」まともに暮らせなければかりか、息さえできない」

人々のまったくの馬鹿さかげんから地球の賢者と呼ばれるようになった別の人物、チル・オイレンシユ・ビーゲルも、次のように言っている。

「あぶらささねば車は行かず」

幾世紀にもわたる人々の集団生活のなかで形成されてきた、これらたくさんの格言を知っている私は、まさにベルゼバブ先生その人の手を「あぶらで汚す」ことに決意した。みなさんもご存じのとおり、ベルゼバブ先生は、何のためにであれ惜しみなく費やすことができるほどの大量の可能性と知識とをお持ちになつていらつしやるのだ。

もう十分だ！ 冗談は、哲学的冗談も含めてすべてやめにしよう。さんざん横道にそれたおかげで、どうやら私は、自分のなかに骨を折って作りあげた重要な原則……この新たな職業を通じて自分の夢を現実にするために私が考案したシステムの基盤となるべき重要な原則のひとつを破ってしまったようだ。つまり、現代の読者の精神機能の衰えを常に考慮し、短い間にもあまりにもたくさんの考えを提供することである。読者を疲れさせないように注意するという原則を

そればかりではない。いつも私のまわりにたむろ

する「どうしても土足のままで天国に入りたい」連中のひとりに、この前書きのなかですでに書きあがった部分を最初から最後まで朗読させてみたことがあつたのだが、このいわゆる「私」がそのときに疑いの余地なく観察し、認識したこととして、この前書きを読むだけで、あらゆる読者の内側には、個人に對する頑固な反感を自動的に引き起こす「何か」が生まれてしまうのだ。もちろん、このようなことを私が認識できたのは、過去の歲月において私独自の精神に形成されて揺るぎないものとなつた素材のおかげ……他のさまざまな能力に加えて、自分と同類ではあるが自分とはタイプの異なる者たちの心理を理解する能力の獲得に役立つ各種の素材のおかげである。

しかし、ほんとうのところを言うと、いまの私がおおいに悩んでいるのはこの認識のせいではない。私を悩ませるのはむしろ、この朗読の後に私に生まれた次のような自覚である。私自身の全体——ふつうに言うところの「私」というのはそのちっぽけな一部にすぎない——が、この章に盛り込まれたさまざまな考えを通じてその力を発揮するなか、私は自分がとりわけ尊敬する万人の教師ムラ・ナスレディンの基本的ないまじめの言葉のひとつである「蜂の巣に棒を突っ込むことなかれ」という言葉の主旨に完全にそむいてしまった。

読者のなかには私への反感が生まれざるをえないという認識が私の感情的部分の全体にもたらした動

揺は、「どんな侮辱でも時がたてば忘れ去られる」という古いロシアの格言を思い出した瞬間に、たちまち収まってしまった。

しかし、ムラ・ナスレディンのいましめの言葉にそむいてしまったという自覚が私にもたらした動揺は、今でも私をひどく悩ませるばかりか、これを自覚した瞬間に私が最近知ることになった「二つのソウル」の両方で異常なかゆみとして始まったとても奇妙なプロセスは、それだけでなく過労ぎみの私の太陽神経叢の右半分の少し下のところに、耐えがたい痛みを引き起こしている。

いや……待った！ このプロセスもどうやら終わりにかけているようだ。そして早くも、私の意識のあらゆる階層には——さしあたって言わせてもらえば「下意識のそのまた下」においてさえ——このプロセスが完全に終わろうとしているのを私に確信させるに十分な認識が生まれつつある。これは、人生の知恵を秘めたもうひとつの小話を私が思い出し、それが私の精神を次のような思いへと導いたからである……たとえ私のしたことが、わが敬愛するムラ・ナスレディンの助言にほんとうに反するものだったとしても、それでもなお、私のしたことははからずも、あのとてもすぐれた感受性をもった、地球のどこでも知られているとはいえないにせよ、それでも一度でも会ったことのある者にはけっして忘れることのできない珠玉のような人物、チフリス*のカラペットが発見した原則に沿ったものであったのではなかったのかと。

* 訳注…チフリスはジョージア（グルジア）の首都トビリシの別名。

もうやむをえない……。この前書きはすでにこんなに長くなってしまっているのだから、私がこのきわめてすぐれた感受性をもったチフリスのカラペットについてもお話しし、それがもう少しばかり長くなったからといって、どうしたというのだ。

まず言うておくと、およそ三十年から三十五年ほど前、チフリス鉄道駅には「汽笛」が据えられていた。

それは毎朝、鉄道労働者や駅員を起こすために鳴らされていたのだが、チフリス駅は丘の上にあつたので、その音はほとんど町中に響きわたり、鉄道労働者ばかりか、チフリスのあらゆる市民の目を覚ますのだった。

記憶によれば、チフリスの地方政府さえもが鉄道当局に書簡をしたため、平和に暮らすチフリス市民の朝の眠りを妨害せぬように要請したこともあつた。毎朝その汽笛に蒸気を送り込むのが、駅に雇われたこのカラペットの仕事だった。

そして毎朝、カラペットは汽笛に蒸気を送るための縄を引きにやってくるのだったが、彼は縄に手をかける前に両手を四方八方にふりかざし、厳粛に、まるでモハメッド教の聖職者がモスクの尖塔で呼ばれるかのように、次のように叫ぶのだった。

「おまえのおふるは××××。おまえのおやじ

も××××。おまえのじじいまで××××。おまえの目ん玉も、耳も、鼻も、脾臓も、肝臓も、魚の目も……」

早い話が、彼は知っているかぎりのあらゆる悪態をついて、それが終わらないことには縄を引こうとしなかった。

このカラペットと、彼のこのような習慣について耳にした私は、ある晩のこと、一日の仕事を終えた後に、「ジョージア東部」カヘティア産のワインを入れた小さな皮袋を携えてカラペットを訪ねた。そしてこの地方では欠かすことのできないものとされている厳粛な「乾杯の儀式」を済ませた後に、私は——もちろん、失礼ではないやりかたで、かつこの地方の複雑な「礼儀作法」に従って——その奇妙な習慣のわけを尋ねた。

ひといきにグラスを空け、有名なジョージアの歌であり、酒の席には欠かせないものとされている『おれたちは酔っぱらいじゃない』を一回歌った後、彼は愉快げに、まず次のような言葉をもって私の質問に答えだした。

「おまえさんは近ごろの連中とは違い、ただ体裁のためにではなく、本当の誠実さをもって酒をお飲みなさる。そこでわしにはわかるのだが、おまえさんは、わしが知っている技師や専門家どもとは違い、ただの好奇心からではなく、本物の知識欲から、わしの習慣についてご存知になりたいのだろう。そこでわしは、わしをこのような奇妙な行動へと導き、だんだんにそれを習慣として確立することとなった、

内面における『細心の配慮』の本当の理由について、おまえさんに心から話したいと思ひ、また、そうすることがわしの義務ではないかとまで思うのだ」

彼はさらに言った。

「わしのかつての仕事は、この駅で夜の間に蒸気釜を掃除することだった。だが、あの汽笛がはじめて駅に据えられたとき、駅長は、わしのような年寄りがそれまでのような重労働を続けるのは無理だろうと考へてに違ひないのだが、それからただ、汽笛に蒸気を送り込むことだけを仕事とするよう、そしてそのため、毎朝、毎晩、規則正しく決められた時間にやってくるよう、わしに命じた。

この新しい仕事を始めて最初の週のある日のこと、仕事を終えてから一、二時間というもの、なんとなく落ち着かない気分になることに気づいた。その奇妙な感覚は日々に強まり、ついには、はつきりした本能的不快感となり、おかげでマホーク*への食欲まで失ってしまうようになると、わしはその原因を知らうとして、くりかえし考えるようになった。これについてわしは真剣に考へ、それもどうしたわけか、仕事の行き帰りにはとりわけ熱心に考へたのだが、どんなにがんばったところで、そのおおよその原因さえわからなかった。

* 訳注：「マホーク」はアルメニアのスープ。ふすまとかぼちやを使ったゼラチン状のすっぱいスープ。

そのようにしてほとんど二年が過ぎ、汽笛の綱で手の平にできたこがとでも固くなってきたころ、ついにわしは、まったくの偶然によつて、その不快感の原因を突如として理解した。

わしの正確な理解のきっかけとなり、この問題についての確信がわしのなかに形成されるための衝撃となつたのは、これから話す、かなり奇妙な状況で、わしがたまたま耳にした叫び声だった。

ある朝のことだった。前の晩の前半を、近所の知り合いに生まれた九番目の娘の洗礼の儀式に費やし、そして後半を、たまたま手に入れた『夢と魔術』という、とてもおもしろくて珍しい本を読んで過ごしたために寝不足のわしは、汽笛を鳴らしに道を急いでいく途中、たまたまある曲がり角で、地方政府の仕事をしている知り合いの床屋外科医*にばつたりでくわした。見ると奴は、こつちに来るなど、身振りをもつて、わしに懇願している。

* 訳注：「床屋外科医」＝簡単な外科施術も行なう床屋

わしの友だちである、この床屋外科医の仕事は、決まつた時間に助手を連れて、特製の車を引きながら町を巡回し、市当局が納税のときに配布する金属製の鑑札を首輪に付けていない犬どもをかたっぱしからつかまえて、屠殺場に連れていくことだ。犬どもは、それから二週間の間、市の費用で屠殺場の屑物を食べて生かされる。だが、その間に飼い主が名

乗りでて決められた税金を払わないようなら、犬どもは、なにやらかめしい雰囲気なかで、じかに特製のオープンにつながっている滑り台の上に放り出されるのだ。

しばらくして、この名高い気の利いたオープンの反対側の口が小気味よいごぼごぼという音をたてると、町の石鹸業者のおやじどものふところを肥やし、またおそらくは他の用途にも使われるに違ひない、透明ですばらしく清潔な一定量の脂肪が流れ出し、次にそれに劣らず耳に心地よいさらさらという音といっしょに、とても優秀な肥料として利用されるかなりの量の物質が吐き出される。

さて、わしの友だちの床屋外科医は、次のような単純で、驚くほど手際の良いやりかたで犬を捕まえていた。

奴はまず、どこからか、大きな、古い、何のへんてつもない漁網を仕入れてきた。そして万人の幸福のためにわしらの町のスラム街の風変わりな巡回にでかける際には、それを上手にたたんで、頑丈な両肩にかついでいった。そして『パスポート』を持たない犬が、イヌ族にとつて恐るべき、なんでもお見通しの両眼の視野に入ってくると、あわてることなく、豹のようになめらかにそと近づき、犬が何かおもしろいものを見つけて気を取られている隙に網を投げ、すばやくたぐりよせる。そして、車を引き寄せ、所定の方法で網をはずすと、そのときには犬はまんまと車のおりに入っているという寸法だ。

わしに来るなど身振りしたとき、この床屋外科医

は、格好の隙をとらえ、尻尾をふりふり雌犬を見ていた次の犠牲者に網の狙いをつけているところだった。ところが、このわしの友だちが網を投げようとしたまさにそのとき、近所の教会が、突然、人々に早朝の礼拝を呼びかける鐘を鳴らした。早朝のしじまを破る鐘の音に肝をつぶしたその犬は、よこつとびに跳ねると、からっぽの通りをイヌ族の最高速度でぶつとんでいった。

この床屋外科医は怒ったのなんの、腋毛も含めた全身の毛を逆立たせると、網を路上に叩きつけ、左の肩こしに唾を吐くと、大声で叫んだ。

『こんちくしょう！ なんてときに鳴らすんだ！』その叫びがわしの思考器官に到達した瞬間、わしの思考器官にはさまざま考えが群れをなして集まってきた。そして、わしが思うには、これらのさまざま考えこそが、先に触れたような本能的不快感がどうしてわしのなかで進行したかについての正確な理解をもたらしたのだ。

わしはその瞬間、これほど単純で明白な理由がそれまで頭に浮かんでこなかったという事実によって侮辱されたかのように感じさせた。

そのときのわしが、わしの存在のすべてをもっと感じたのは、わしが皆の生活に及ぼしてきた影響のことを考えれば、先ほど言ったような現象が私に起きるのはまったくあたりまえだということだ。

まったくの話、わしの汽笛の騒音で朝の甘美な眠りを破られた連中がひとり残らず、その地獄のような大音声の原因であるこのわしを『日のもとのすべ

て』をもって呪わないわけはなく、その結果として当然ながら、ありとあらゆる悪意をはらんだ振動が、四方八方から、わし個人へと流れ込んでいくに違いないのだ。

この記念すべき朝、仕事を終えた後にいつものように暗い気分になったわしは、近所の食堂でニンニク入りのハチ「インドのナンに似たジョージアのパン」を食べながら、さらに考えつづけた。そしてわしの出した結論は、もしもわしがあらかじめ、前の晩に読んだ本に説明されているとおりに、わしが一部の人々のためにしているこの仕事を迷惑と思いかねないような連中をひとまとめにして呪っておけば、『白痴の領域に横たわる輩』と呼ばれるにふさわしいような、つまり半分眠ったこれらの連中がたとえわしを呪ったところで——やはり同じ本の説明によれば——わしには痛くもかゆくもなからうということだ。

そして実際、それを実行して以来、先に触れたような本能的不快感、さっぱり感じられなくなったのだ。

さあ、やっと、わが我慢づよい読者よ、私がほんとうにこの前書きの章をしめくらねばならないときがきた。あとは署名するだけだ。私こと……

いや待った！ 気をつけなければ！ 署名に冗談は許されない。さもないと、かつて中央ヨーロッパのある帝国で、実際には三ヶ月しか住まなかった家のために十年分の家賃を払わされた男のようになるかもしれない。その男がそんなはめに陥ったのも、

その家の契約を年ごとに更新することをうたった紙一枚に署名してしまったからだ。

もちろん今回ばかりではなく、人生における他の場合においても、私は常に、署名にあたっては十分すぎるほどに気をつけなければならない。

よろしい。では。

私こと、幼年時代には「タターク」、青年時代の初期には「ダーキイ」、その次には「黒いギリシヤ人」、壮年時代には「トルキスタンの虎」と呼ばれ、今でもありふれた「だれかさん」ではなく、本物の「ムッシュー」または「ミスター」ゲルジェフ、あるいは「ム克蘭スキー公爵」の甥、そしてたんに「舞踊教師」と呼ばれし者。